京都女子大学発達教育学部紀要　2023,　第19号

いいだ人形劇センター人形劇講座の検証
−文化・芸術によるまちづくり・ひとづくりを目指して−

松　崎　行　代
（児童学科）

要旨：本研究は、特定非営利活動法人いいだ人形劇センターの９年間の成果を、人形劇センターの実施事業「人形劇講座」に焦点をあてて検証した。９年間の人形劇講座の記録からは、人形劇センターが市民の人形劇へ関心を広く集めることをねらい多様な講座が開講され、継続的に一定の受講者があり、数多くの劇団や作品が人形劇講座を通して誕生したことが明らかとなった。受講生へのアンケート調査からは、人形劇への理解の深まりが多くの受講生にもたらされ、その知識や技能をもとにした人形劇作品の制作・発表公演を通し、自己実現の喜びやまちづくりへの関心が広がりつつある実態が検証できた。

キーワード：人形劇，文化・芸術活動，ひとづくり，まちづくり

１．研究目的および方法

飯田市は「人形劇のまち」として、まちづくりに取り組んできた。そもそもこの地域は、江戸時代より奉納芸能また庶民の楽しみとして人形浄瑠璃がいくつもの集落で取り組まれ、そのうち「今田人形座」と「黒田人形座」は350年を越えて現在も継承されている。こうした文化的土壌があったうえに、1979年にはじまった「人形劇カーニバル飯田（以下、人形劇カーニバルと記す。）」により、人形劇は子どもから大人まで幅広い市民にとって身近な文化として広がった。こうして人形劇カーニバルが市に定着し、人形劇や人形劇カーニバルのまちづくりへの有効性、価値が人形劇関係者ばかりでなく市民にも広く理解されるようになると、1996年の「飯田市第４次基本構想」に「人形劇のまちづくり」が明確に設定され、行政は人形劇を核とする文化政策によるまちづくりに取り組み始めた。1999年には、人形劇カーニバルは「いいだ人形劇フェスタ（以下、人形劇フェスタと記す。）」に生まれ変わり、市民によって構成する実行委員会が企画運営する市民文化活動として、人形劇によるまちづくり・ひとづくりを目指す意味合いを大きくした。

本研究で取り上げる「特定非営利活動法人いいだ人形劇センター（以下、人形劇センターと記す。）」は、こうした飯田市の「人形劇のまちづくり」への取り組みのなか、2011年に飯田市教育委員会が設置した「人形劇のまちの将来を考える会」にて策定された「人形劇のまちづくりを推進する新たな仕組みに関する方針」（2012年２月飯田市教育委員会）で提案され、2012年12月に設立した。

人形劇センターは、市民や人形劇関係者がわくわくできる取組み、それまで不十分であった専門的な人形劇に関する支援、人形劇に関わる人の心の拠り所となれるような活動など、人形劇のセンター的な役割を担い、行政や人形劇フェスタ実行委員会などと横の連携をとりながら、日本最大の人形劇の祭典として盛り上が

る人形劇フェスタ以外の期間も、年間を通し人形劇が息づくまちを目指して活動を始めた。この人形劇センターが2022年に10周年を迎えるにあたり、開設以来９年間の成果を検証し、今後の人形劇センターのあり方を検討することとなった。筆者はこれまで、飯田市を研究フィールドとして人形劇フェスタを核とした人形劇によるまちづくりに関する研究に取り組み、また、人形劇センターの理事としてセンターの事業にも関わってきた。そこで、これまでの研究の成果や知見を活かし、本研究に取り組みたいと考えた。

本研究では、人形劇センターの開設以来９年間にわたる「人形劇のまちづくり･ひとづくり」に関わる取り組みの成果検証の一環として、人形劇センターが重点的に取り組んできた市民が人形劇を「演じる」活動を活性化するための人形劇創造事業の１つ「人形劇講座」に焦点をあて、その記録を整理するとともに成果の検証を行い、今後の課題を明らかにすることを目的とする。

研究にあたっては、まず、人形劇センター事務局に保管されている９年間にわたる「人形劇講座」に関する各種資料より講座の種類や内容、参加者の実態や状況をまとめ整理する。そのうえで、講座の見学や講師および講座をささえる事務局職員への聞き取り、受講者へのアンケート調査を実施し、「人形劇のまちづくり・ひとづくり」としての「人形劇講座」の成果を分析、考察し、今後の課題を明らかにする。

２．いいだ人形劇センターの役割と「人形劇講座」について

１）人形劇センターにおける「人形劇講座」の位置づけ

人形劇センターの目的は、「市民と人形劇に関わる人たちに対して、人形劇に関する事業を行い、市民文化と人形劇文化及び飯田地域全体の活性化に寄与すること」とし、目的を達成するために次の７つの事業を行っている。国内外の注目すべきプロ劇団や人形劇講座を受講したアマチュア劇団などの公演を行い、観る活動の充実をはかる「人形劇鑑賞促進事業」。人形劇講座や講演など人形劇の学びの場を提供し、人形劇を演じる活動の充実をはかる「人形劇創造事業」。季刊誌およびホームページなどを活用した人形劇の多様な情報発信を行う「人形劇情報受発信事業」。人形劇のまちの発展に向けた調査研究を行う「人形劇研究事業」。人形劇に関する様々な相談や小中学校の人形劇活動の支援を行う「人形劇活動サポート事業」。指定管理する川本喜八郎人形美術館の活性化と運営を行う「人形館利活用事業」。本研究で取り上げるのは、「人形劇創造事業」として行われている「人形劇講座」である。

２）人形劇講座の種類と各講座の概要

開設以来９年間に実施された「人形劇講座」は、（表１）に示すとおりである。大別すると実技系として【人形劇講座】、【フィギュア・シアター講座】、【人形アニメーション講座】、【イベント併催ワークショップ】、講座系として【講演会・講座】の５つとなる。一見して、人形劇の種類やレベル、また、受講対象者、内容など、幅広く多岐にわたっていることがわかる。

【人形劇講座】は、人形劇をつくり上演するまでのすべての過程をプロの講師から学ぶ。未経験者向けの〈初級コース〉、経験者向けの〈中級コース〉、中学生以上の学生対象の〈ユースクラブ〉、演じるための身体レッスンを主にした〈基礎レッスン〉の４つの講座がある。〈中級コース〉は、〈初級コース〉受講修了者によって結成された劇団や、既存の市民アマチュア劇団が団体で受講することが多い。〈ユースクラブ〉は、専門的知識を持った指導者がいない中学校の人形劇クラブの生徒や、中学校の人形劇クラブ出身者が、高校進学後、継続して人形劇に取り組む場として設定された。また、〈人形劇センタープロデュース公演「人魚姫」〉は、人形劇講座受講者を中心にプロと市民がつくり上げた人形劇を、人形劇センターがプロデュースし市内外で公演を行う活動への取り組みである。人形劇「人魚姫」は、2015年の８月の人形劇フェスタでの初演以来、同年10月には台

湾の雲林国際人形劇フェスティバルで海外公演を実現した。2019年の再演では、人形劇フェスタの他下条村公演を実施。さらに、2021年には県内ツアーとして長野市・飯島町・飯田市・松川村での公演が計画された。（ただし、新型コロナウイルス感染拡大のため長野市での公演以外は中止となった。）

【フィギュア・シアター講座】は、現在チェコで活躍する沢則行を講師に、手、足、腹などの体の一部や影や光などが一時的に生命体に見立てられる「フィギュア・シアター（形象劇）」を学ぶ。世界的に認められ海外で活躍する沢の講座は、人形劇に関心を持つ市民にとって、新たな表現を模索する人形劇として注目されるフィギュア・シアターへの関心とともに、世界的に活躍する講師から直接学ぶことも大きな魅力であった。〈フィギュア・シアターデザインコース〉では受講生各人が作品案を構想してプレゼンテーションを行い、選考された1作品を〈巨大人形劇プロジェクト〉講座において人形作りから公演までに取り組み、最終的に野外劇場級の大型人形劇の公演を行った。

【人形アニメーション講座】は、人形劇センターが指定管理する「川本喜八郎人形美術館」にちなみ、川本が取り組んだ「コマ撮り」の手法で制作する人形アニメーションを学び作品制作を行った。

【イベント併催ワークショップ】は、市街地で開催されるイベントに併せて開催する短時間の単発ワークショップである。飯田市の伝統芸能である獅子舞いと人形浄瑠璃への関心の広がりをねらい親子で獅子舞を作り演技までを体験する〈ダンボール獅子舞い〉と、文楽といわれる三人遣い人形の操演を体験する〈三人遣い人形〉のワークショップを行っている。

【講演会・講座】は、世界の人形劇の動向を知る講演会、市の伝統文化や産業と人形劇を結び付けた講座などを開催し、人形劇に関しての知識を深めたり、興味関心の広がりをねらって開催された。

3）各種人形劇講座開設の変遷

人形劇センター開設以来、現在まで継続して実施されているのは【人形劇講座】と【イベント併催ワークショップ】である。【フィギュア・シアター講座】【人形アニメーション講座】は、〈巨大人形劇プロジェクト〉、〈こま撮りアニメーションパーフェクトコース〉の各講座において制作した作品

表1　人形劇センターにおける人形劇講座開催の記録

区分	講座名	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
人形劇講座	初級講座		1団体10人							
	初級コース			4人	16人	14人	9人+1団体8人	7人+1団体8人	1団体8人	1団体8人
	中級コース			身体訓練：10人 人形遣い：11人	前期：11人 後期：1人	3団体（1人・5人・7人）12人	3団体（10人・7人・4人）21人	3団体（10人・7人・3人・3人）23人	3団体（3人・3人・1人）7人	4団体（3人・3人・6人・1人）13人
	ユースクラブ				ユースクラブ 20回：2人	45回：4人	0人	3回：8人	20回：6人 短期講座：13回：2人	2団体（3人・10人）13人
	人形劇センタープロデュース「人魚姫」公演	19人	27人	13人			17人	28人	20人	19人
	基礎レッスン	インプロビゼーション：14人 三人遣い：19人		布袋戯：14人 身体訓練：10人	身体訓練：10人	身体訓練：28人	身体訓練：22人	身体訓練：16人	身体訓練：13人	
フィギュア・シアター講座	フィギュア・シアターデザインコース		20人	35人						
	巨大人形劇プロジェクト			20人	53人	70人				
人形アニメーション講座	アニメーションの作業場	上演会：20人 アニメ撮影：8人								
	こま撮りアニメーションパーフェクトコース		11人	12人						
イベント併催ワークショッ	ダンボール獅子舞い	（52組）100人		81人	70人	38人	43人	33人	20人	57人
	三人遣い人形	20人	50人		55人	45人	50人	50人		
	お面づくり	15人								
講演会・講座	講座						舞台の裏方講座（音響・照明）：5人			
	講演	世界の人形劇を知る：	チェコと日本の人形劇に触れる：20人		ベイビードラマ：55人 父と暮らせば読み解く会：20人	大人のための人形劇講座1「酒と人形芝居」　？人	大人のための人形劇講座2：71人	大人のための人形劇講座3（中止）		

の発表で一区切りとなった。これは、海外や都内からの講師の招聘にかかる問題、講座をサポートする事務局職員の負担超過、人形アニメーション作品の制作に関しては受講生全員が関わっての分業の難しさなどがあった。〈巨大人形劇プロジェクト〉に参加した受講生は、講座修了後、人形劇センターから独立して活動することとなったが、大型で特殊な人形のため稽古や公演が容易ではないこと、また、指導者不在のなかでの活動継続は難しかったようである。

【人形劇講座】は、人形劇を演じる活動への関心を広げ、市民のアマチュア人形劇団の育成を支援することをねらっている。講座で扱う人形劇は、一般の人が観たり演じたりすることの多い片手遣いや棒遣いの人形を用いたものである。2015年度より〈初級コース〉〈中級コース〉の２コースを設け、受講者のレベルに応じた講座が選択できるようにした。この２つのコースは、これまで毎年一定の受講生数があり、現在に至っている。ただし、（表１）に示した2020年度･2021年度の〈初級コース〉受講生８名は、2019年度から継続して同コースを受講している８名であり、新型コロナウイルス感染拡大のため、新規の受講生はいなかった。〈基礎レッスン〉は、人形劇センター設立以降継続して開催されてきたが、2021年度は講師からの申し出により実施を中止した。この基礎レッスンでは、人形劇を演じるための身体訓練を中心としたが､作品づくりとは異なる地味な活動に対し、必要性を理解して積極的に参加する受講生が少ない実態が続いたことが中止の理由となった。

4）各講座の受講生

各年度の各講座の受講者数は、（表１）に示した通りである。同年度に複数の講座を受講している人、また、数年間同じ講座を継続して受講している人も多い。単発の開催ではない【人形劇講座】【フィギュア・シアター講座】【人形アニメーション講座】の９年間の実受講者数の総計は、111名であった。

人形劇講座は市外在住者の受講も可能であり、飯田市在住者は75人、飯田市近隣の下伊那郡内の町村在住者は18人、その他の長野県内の市町村在住は15人、県外在住者は３人であった。県外在住者の３名は東京都在住､また、県内在住者のなかには飯田市から車で２･３時間かかる地域から参加している人もいた。

受講者の年齢については、【フィギュア・シアター講座】【人形アニメーション講座】の受講者は、20歳代から40歳代が多いが、【人形劇講座】の参加者は50歳代・60歳代の参加者が多い。これは､１つにはフィギュア･シアターという現代人形劇のなかでも新しい人形劇の形態や人形アニメーションという映像作品は、若年層が強く関心を持つからといえる。一方､【人形劇講座】への30歳代・40歳代の参加が少ないことに関しては、ワークライフバランスの問題から仕事と趣味・社会活動との両立が難しく、専業主婦やパート勤務の人、または、定年退職後の時間にゆとりがある人でないと継続的な講座への参加や地域いでの人形劇活動への取り組みが難しいという状況があるためと考えられる。

5）【人形劇講座】の様子

「人形劇講座」のこれまでの各種講座は、１つの作品をつくる小グループや劇団への個々の対応により開催日時を設定して指導が行われてきた｡例えば､2021年度の【人形劇講座】の｢中級コース」受講者は（表１）に示したように３人･３人･６人・１人の４劇団であり、これに対し、講座は４劇団まとめてではなく、各劇団の希望に沿うように曜日や時間が設定されて実施された。講師は市外から来飯するため毎回参加することが難しいこともあり、講師が参加できない場合は事務局職員が付き添っての自主稽古となる。

〈初級コース〉も〈中級コース〉も作品づくりが講座の活動内容となるため、各作品への指導を充実させるにはグループや劇団ごとの対応が必要になるが、その分、講師および事務局の対応は負担が大きい。ただし、受講生にとっては、自分たちだけを対象とした指導が毎回受けられる環境は望ましく、満足し、事務局の対応に感謝の意を強くする受講者が多い。

一方、〈人形劇センタープロデュース公演「人魚姫」〉には、20歳代から60歳代と幅広い年代層が参加しており、全員が参加できる時間は就業後の夜となる。仕事や家庭の事情で欠席せざるを得ない人が出てしまいなかなか全員が揃わなかったり、公演前には長時間にわたる稽古が必要になるなど、身体面・精神面ともに前向きに取り組める状態を参加者全員が保つのに苦慮することもあった。プロデュース公演は、一定のチケット代をとっての公演となり、単なる講座修了時の発表公演とは異なる意味合いを持つ。その分、やりがいは大きいが責任も大きくなる。市民の文化活動として何を目的とするかを明確にしておくことが重要になってくる活動といえる。

6）人形劇講座から結成された劇団とその活動について

2013年度から2021年度までの9年間を通し、【人形劇講座】から新たに誕生した人形劇団は、13劇団を数えた。この他に、新作づくりや既存の作品のブラッシュアップを目的に参加した既存の劇団は3劇団である。これら合計16の人形劇団は、人形劇センターが実施している「人形劇定期公演」や人形劇フェスタはもとより、市内でのイベント開催の折には積極的に上演を行っている。

人形劇センター開設以前にも飯田市には10劇団ほど社会人のアマチュア劇団が活動しており、定期的な人形劇公演の開催があったが、なかなか長続きしないという状況があった。しかし、人形劇講座から新たな劇団が次々に誕生し、講座修了時の発表の場として、また、その後の上演の場として人形劇センターが実施する「人形劇定期公演」が位置付けられるようになり、2015年以降、「人形劇定期公演」は、年7回（4・9・10・12・1・2・3月）の開催が定着するようになった。（ただし、2020・2021年度はコロナ禍により中止された回もある。）

8月の人形劇フェスタの期間だけでなく、年間を通して人形劇が楽しめるまちを目指していた飯田市において、これは大きな意味のある成果といえる。

3．受講者へのアンケート調査より

1）アンケート調査について

「人形劇講座」のうち、単発の講演会・講座以外の【人形劇講座】【フィギュア・シアター講座】【人形アニメーション講座】の受講者に対し、講座に何を期待して参加したのか（「人形劇講座」受講の理由）、講座を受講して得た経験や学び（講座を受講して良かったと思うこと）、講座を受講し人形劇を演じる活動をするようになったことが受講者自身にもたらしたこと（「人形劇講座」受講を通した変化）などについて実態を把握するために、アンケート調査を実施した。

- 実施期間：2021年4月5日～5月2日
- 実施方法：自記入式アンケート調査票。

人形劇センター事務局より郵送または手渡しで配付。返信用封筒にて郵送または事務局へ直接提出にて回収。

- 対象者：2013年度～2021年度【人形劇講座】【フィギュア・シアター講座】【人形アニメーション講座】受講生　111人
- 配付数：111人
- 回収数：44人
- 回収率：39.6％
- 有効回答数　43
- 無効回答数　1

2）受講理由

受講理由について、該当する項目への複数回答の結果は、（表2）に示した通りである。

上位をみると、1位に「単純に人形劇に関心があり、やってみたいと思った」（20人）があげられた。2位の「地域のボランティア活動で人形劇を演じたいと思った」（19人）とは僅差であるが、特に目的を持たず人形劇が身近な文化としてあったことが受講のきっかけとなった人が多いことは、人形劇のまち飯田ならではないかといえる。そしてこれは、3位の「なにかやってみたいと思っていたときに、たまたま人形劇講座のことを知って参加した」（14人）や「一緒になにかをやる友達づくりの場になるのではないかと考えて参加した」（10人）、「『人

表２：受講の理由（複数回答）

N=43

	選択肢	人
1	単純に人形劇に関心があり、やってみたいと思った。	20
2	地域の活動やボランティア活動で人形劇を演じたいと思った。	19
3	なにかやってみたいと思っていたときに、たまたま人形劇講座のことを知って参加した。	14
4	いいだ人形劇フェスタや人形劇定期公演で人形劇を演じているアマチュアの人たちを見て、自分もやってみたい、自分にもできるのではと思った。	11
5	いいだ人形劇フェスタに、観劇参加だけではなく「劇人」として上演参加してみたいと思った。	11
6	「人形劇のまち」と言われている飯田市のまちの文化として位置づいている人形劇をやってみようと思った。	10
7	一緒になにかをやる友達づくりの場になるのではないかと考えて参加した。	10
8	自分の子どもや身近な子どもたちに、人形劇を観せたいと思った。	9
9	ものを作るのが好きなので、人形を作ってみたいと思った。	9
10	これまで自己流で人形劇に取り組んでいたので、プロの専門家の指導を受けてより良い作品づくりや上演ができるようになりたいと思った。	9
11	プロの人形劇人が講師をしてくれると聞き、プロの方と関われることが魅力的だった。	9
12	自分とは違うもの（役）になって演じることをやってみたいと思った。	8
13	ステージに立つ経験をしてみたいと思った。	7
14	人形劇をやる仲間が身近にはいなかったので、講座に参加することで劇団を作りたいと思った。	2
15	その他	2
16	職場で人形劇を演じたいと思った。	1
17	職場で人形劇に関する知識や技能を活かし、教えたいと思った。	1
18	子どもといっしょに親子で人形劇を演じて遊び楽しみたいと思った。	1
19	地域の活動やボランティア活動で人形劇に関する知識や技術を活かし、教えたいと思った。	0
20	なかなか観客に喜んでもらえる人形劇ができずに悩んでいたので、問題解決のために参加した。	0
	NA	1

形劇のまち』と言われている飯田市のまちの文化として位置づいている人形劇をやってみようと思った」（10 人）と回答した人が多いこととも重なるといえる。

一方、2 位にあがった地域のボランティア活動での活用や、「いいだ人形劇フェスタに、観劇参加だけではなく『劇人』として上演参加してみたいと思った」（11 人）、「自分の子どもや身近な子どもたちに、人形劇を観せたいと思った」（9 人）など、受講後の上演活動を目指して参加した人も多い。

人形劇が身近にあったからというやや漠然とした理由と、上演を目標とした理由の二側面が明らかとなり、受講者の受講理由の幅広さがうかがえる。

表３　人形劇講座に参加して良かったこと（複数回答）

N=43

	選択肢	人
1	人形の操作の仕方を知ることができたこと。	35
2	人形の作り方を知ることができたこと。	33
3	観客が自分たちの人形劇を観て反応したり喜んでくれたこと。	32
4	人形劇の演出や演技指導について知ることができたこと。	31
5	自分たちでつくった人形劇を上演することができたこと。	31
6	いいだ人形劇センターの職員、文化会館職員などと出会えたこと。	29
7	人形劇をつくり上演できたことで、自分に自信が持てたり、やり終えた満足感を感じられたこと。	25
8	講座などに参加した人たちと知り合いになれたこと。	25
9	劇団のメンバーと協力し合い気持ちをひとつにして取り組む楽しさや充実感を感じたこと。	25
10	自分の人形を作り上げることができたこと。	24
11	じっくり時間をかけて丁寧に作品づくりができたこと。	24
12	講座修了後に、人形劇定期公演をはじめ上演の場が得られたこと。	14
13	センター発行の季刊誌「Dogushi 他マスメディアに取り上げられたこと。	13
14	飯田市外、海外などでの上演の機会を得たこと。	11
15	その他	0

2）講座に参加して良かったこと

人形劇講座に参加して良かったことに関しての回答は、（表３）に示した通りである。

上位には、「人形の操作の仕方を知ることができたこと」（35 人）、「人形の作り方を知ることができたこと」（33 人）、「人形劇の演出や演技指導について知ることができたこと」（31 人）といった、人形劇作品をつくりあげるための知識や技能の修得があがった。それらにあわせ、若干人数は少ないが、「観客が自分たちの人形劇を観て反応したり喜んでくれたこと」（32 人）、「自分たちでつくった人形劇を上演することができたこと」（31 人）、「人形劇をつくり上演できたことで、自分に自信が持てたり、やり終えた満足感を感じられたこと」（25 人）、「劇団のメンバーと協力し合い気持ちをひとつにして取り組む楽しさや充実感を感じたこと」（25 人）など、人形劇上演活動を通しての自信や満足感、協同の喜びといった自己実現にかかわる内面的な成長に関して満足感を得たという人が多かった。

人形劇講座では、〈初級コース〉も〈中級コー

ス〉も、講座修了時に人形劇センターが実施している「人形劇定期公演」での上演を行うこととしている。

前掲の人形劇講座の受講理由のアンケート結果からは、当初から上演することを目的に受講してはいなかったと思われる人が多かったが、受講を終えて良かったと思うことについては、人形の作り方や操作、演技といった技能面の修得、そして、観客が喜んでくれたことを回答した人が30人以上と7割を超えた。上演を通して観客に喜んでもらえたことは、受講者にとって、観客とのつながりを感じながら楽しめるという生（なま）の舞台芸術ならではの人形劇の魅力を知る経験となり、観客を喜ばせるための技能修得の重要性を感じたのではないかと考えられる。

3）講座を通しての変化

「人形劇講座」を通して、受講生が自身の成長をどう認識しているかについて、成長を受講前との変化として判断し回答してもらった。成長をみる6つの観点の設定においては、藤野一夫の文化・芸術によるひとづくりの考えを参考にした。藤野（2022）は、文化・芸術はエンパワメントやQOLの向上に貢献するものであり、人を元気にする力を持っていると述べ、自立的に考え、動き始めることのできる人が本当の意味での“市民”であり、そういった市民を生み出すことが文化・芸術によるひとづくりであるとしている。そして、そのような育ちをもつことで“市民”にまちのことを考えるゆとりが生まれ、まちづくりへの活動への取り組みが生じ、まちづくりが実現されると述べている。これを参考に、成長をみる観点に「人形劇による自己実現」「生活の充実」を含め、「人形劇の理解の深まり」「市民への人形劇文化の広がりへの期待」「人形劇のまち飯田への関心の高まり」とあわせた5つを設定し、設問を考えた。

回答の結果は（表4）に示した通りである。

受講者の多くが変化を認識し成長したと回答したのは、「人形劇の理解」と「市民への人形劇文化の広がりへの期待」であった。その次に「人形劇を通した自己実現」が続く。前節でも述べたが、人形劇を演じる活動は観客があって成り立ち、独りよがりではなく観客である他者の感動・楽しみのもとに満足感や喜びを得ることができる。その点から考えると、人形劇へ

表4　人形劇講座を通した自身のひとづくりの評価

N=43

		以前から感じていた	講座を通して感じるようになった	そうは思わない	NA
人形劇の理解	•人形劇の奥深さをより感じるようになった。	5	37	0	1
	•人形劇の芸術としての価値をより高く感じるようになった。	9	33	0	1
	•人形劇は子どもだけのものではなく、子どもから大人までが楽しめる芸術だと感じるようになった。	14	26	1	2
	•観客に自分たちの人形劇を楽しんでもらえるためには、工夫や努力、練習の積み重ねなどが必要だと感じるようになった。	11	29	2	1
人形劇の広がり	•以前にもまして、よりたくさんの人たちに人形劇を楽しんでほしいと思うようになった。	7	33	0	3
	•人形劇を演じる人・劇団が、地域社会にもっと増えるといいと思うようになった。	5	34	1	3
人形劇のまち飯田への関心	•飯田市民としてこのまちに住むことへの喜びを感じるようになった。（＊飯田市民の方のみ）	3	18	5	17
	•「人形劇のまち」をつくる一人なんだという意識を感じるようになった。	1	26	9	7
	•飯田市が、一年を通してもっと人形劇を楽しめるまちになるといいなと思うようになった。	6	25	5	7
	•これからも飯田のまちとかかわって、人形劇を演じたり観劇したりしたいと思うようになった。	9	25	2	7
	•飯田市のまちづくりに関心が持てるようになった。	3	23	9	8
人形劇を通した自己実現	•人形劇は、自分にとっての自己表現の場だと感じるようになった。	6	28	4	5
	•自分がやりたいとや考えたことが実現でき、自信が持てるようになった。	2	30	6	5
	•自分たちの人形劇を喜んでくれる人がいることで、自分の存在価値や生きる喜びを感じるようになった。	6	25	6	6
	•自分の得意分野が活かせて自信が持てた。	4	25	8	6
	•仲間とお互い同士が認め合う信頼関係が強まり、つながりが強まったと感じるようになった。	7	27	3	6
	•自分の生活のなかで、人形劇の優先順位が高くなった。	5	24	9	5
生活の充実度の高まり	•人形劇以外の文化芸術にも関心が広がるようになった。	10	20	9	4
	•生活に張りができて、楽しいと感じることが増えた。	7	24	5	7
	•劇団の上演活動が増え、地域の様々な人との出会いやつながりが増えたと感じるようになった。	5	26	7	5
	•人形劇に取り組む自分を見て、家族の自分に対する見方が変わったと感じるようになった。	4	16	18	5
	•人形劇に取り組む自分を見て、知人の自分に対する見方が変わったと感じるようになった。	2	17	19	5
	•人形劇を通して、自分自身が地域社会とつながっていると感じるようになった。	5	22	11	5

の理解を深め技能を修得したことで、観客を喜ばせる上演が可能になり、観客の喜びを上演者として受け止められたことで自己実現の達成を感じることができたといえる。「人形劇を通した自己実現」および「生活の充実やそれへの意識」に関しては、「自分がやりたいと考えたことが実現でき、自信が持てるようになった」に30人が、「人形劇は、自分にとっての自己実現の場だと感じるようになった」に28人が、変化を感じたと回答している。

そこからさらに藤野が述べた、まちのことを考える市民への育ちに関しては、「生活の充実」や「人形劇のまち飯田への関心」にあげた事項への変化と考えるが、この2つの観点に関しては、他の3つに比べ変化を認識した受講者はやや少なかった。

4.「人形劇講座」の成果と課題

人形劇センター開設から9年間にわたる「人形劇講座」は、センターに課せられた専門的な人形劇に関する支援をさまざまな講座の開催と、受講者の参加のしやすさに配慮した講座運営によって実現したと考えてよい。それは、受講者が人形劇への理解を深めたと自ら認識し、観客に喜んでもらえる人形劇を上演できる劇団を数多く生み出した結果にみることができる。また、市民や人形劇関係者がわくわくできる取組みという点に関しても、講座に継続参加し作品づくりや既存の作品のブラッシュアップに取り組む受講者が数多くいることは、講座に対しての前向きな取り組みと受講による学びの成果を受講者自身が感じ満足している結果の表れといえる。

ただし、(表1)に示したように多様な講座を設定しているわりに、受講者の広がりが9年間で111人という状況については、課題といえるのではないだろうか。(表4)の結果からは、「市民の人形劇文化の広がりへの期待」として、受講者は、人形劇を演じる人の広がりも願っている。しかしながら、飯田市においてはこれまでも市民のアマチュア劇団が自ら動き活動を進めることがほとんどなかった。例えば、筆者が調査した枚方市では、人形劇市民講座受講生によって誕生した数劇団がもとになって「枚方人形劇連絡会」が結成され、自分たちの技能向上のための人形劇講座を企画運営したり、市に要望し「枚方人形劇フェスティバル」を誕生させるなど主体的な活動に30年以上取り組んでいる。また、船橋市でも同様に市民のアマチュア劇団によって「船橋地区人形劇連絡会」が結成され、40年以上にわたり地域の人形劇活動の振興に従事してきた[1)]。

藤野が述べた「自立的に考え、動き出せる市民」を育てる意識を、人形劇センターは持っているだろうか。この点については、今後、人形劇のまちとは何を目指すのか、具体的な育てたい市民像やまちの姿について、人形劇センター関係者ばかりでなく、市民の声、人形劇関係者の声をききながら検討していく必要があるだろう。

また、これと関連するが、長期計画のもと、どのようなひとづくり・まちづくりを目指すのか、そして、その目標達成のためにどんな内容の講座を実施すべきなのかを慎重に検討する必要があるのではないか。今回の受講生のアンケート調査では、受講生は学びの成果をそれぞれが一定認めていた。しかし、9年間の人形劇講座の変遷において、【フィギュア・シアター講座】や【人形アニメーション講座】が1回の作品制作と発表で終了を迎え、その後に続く講座が新たに企画されていないことなど、広い視野で総合的に捉えて考えていくことが人形劇センターに求められていると考える。

2022年の10周年を一区切りとし、現在、人形劇センターでは今後5年を見据えた中長期計画を作成し新たな一歩を踏み出そうとしている。本研究も結果をそこに活かしていきたい。

註

1) 松崎行代　2022 「地域の文化活動に取り組む女性たち－アマチュア人形劇団の活動を事例として－」京都女子大学発達教育学部紀要第18号 pp.155-166

参考文献

藤野一夫 2020『基礎自治体の文化政策　まちにアートが必要なわけ』水曜社 pp.92-100